

【公表用資料】 2025 年度苫小牧沖における秋季調査（2025 年 11 月）及び
晩秋調査（2025 年 12 月～2026 年 1 月）結果（概要版）

2016 年 4 月から苫小牧沖において、海洋汚染等防止法に基づく環境大臣の許可を受けた国内第 1 号の海底下 CCS 事業である苫小牧沖海底下 CCS 実証試験事業が開始され、海底下への CO₂ の圧入が経済産業省により実施されてきました。2019 年 11 月末までに約 30 万 t の CO₂ が圧入され終了しました。

2025 年度秋季（2025 年 11 月）及び 2025 年度晩秋（2025 年 12 月～2026 年 1 月）に環境省が調査した結果、2011 年度から 2024 年度までの調査¹⁾と比較して、夏季調査時に CO₂ 漏出による影響を否定できないデータがみられた 4 測点（調査測点 1、2、3 及び 6）も含め大きな変化はみられず、海洋への CO₂ の漏出が懸念されるデータは確認されませんでした。

【調査の概要】

海底下 CCS 事業に係る許可制度の規制当局である環境省として、独自に最新の知見に基づくモニタリング技術を活用し、結果を検証していくことにより、海底下 CCS 事業における適切な海域のモニタリング技術及びその適用方法の確立を図ることを目的として、苫小牧沖において海洋調査を実施しました。

調査海域は苫小牧沖の約 10 km×8 km の範囲とし、海水の化学的性状、底質及び海洋生態系の変化について、図 1 に示す測点で調査しました。

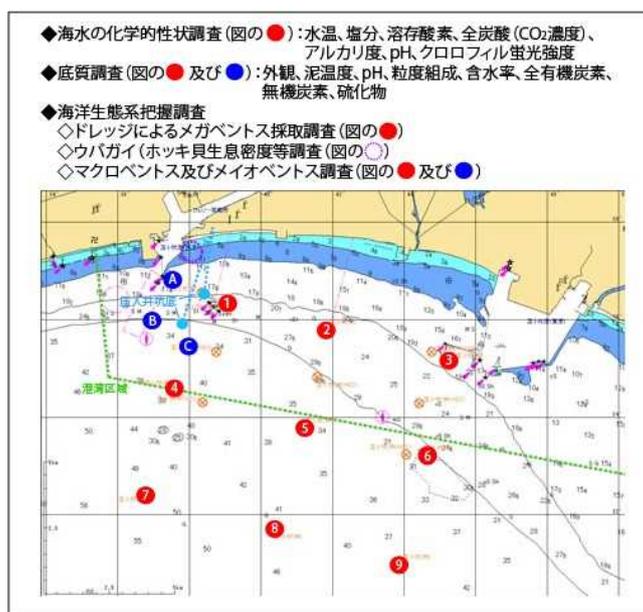


図 1 調査海域及び調査測点

¹⁾ 2011～2024 年度に実施した海底下 CCS 実施のための海洋調査事業

1. 海水の化学的性状調査

万が一、圧入された CO₂ が漏出した場合、海水中の CO₂ 濃度や平衡状態が変化すると予想され、例えば CO₂ の分圧 (pCO₂)²⁾ 及び全炭酸 (DIC) 濃度の上昇や pH の低下が起こることが考えられます。このような変化を検知するため、採水を行い、海水中の CO₂ に関係するパラメータとして DIC、アルカリ度、pH 及び塩分について分析し、pCO₂ を算出しました。

海水中の CO₂ 濃度は、CO₂ の漏出のような外的な要因だけでなく、例えば海水の混合度合いや生物の呼吸・光合成などにより著しく変化します。これらの影響を把握するため、多項目水質センサを用いて水温、塩分の分布を把握し、溶存酸素 (DO) や光合成を行う植物プランクトンの指標となるクロロフィル蛍光強度³⁾についても鉛直観測をしました。

海水の化学的性状調査は秋季調査を 2025 年 11 月 8 日、12 日、19 日に、晩秋調査を 2025 年 12 月 18 日、19 日にそれぞれ実施しました。

2. 底質調査

底泥中の水分 (間隙水) に CO₂ が溶解すると pH の低下が起こります。この変化を検知するため、採泥を行い、間隙水の pH (以下、「底質の pH」といいます。) を測定するとともに、関連項目として含水率、有機炭素、無機炭素、全窒素及び硫化物について分析しました。

底質調査を秋季調査は 2025 年 11 月 14 日、15 日、18 日に、晩秋調査は 2025 年 12 月 8 日、10 日、23 日にそれぞれ実施しました。

3. 海洋生態系把握調査

海洋生態系のうち、海底面上または底泥中に生息する底生生物は、海中を遊泳する魚類等と比較して移動範囲が狭いことから、底泥中の間隙水に CO₂ が溶解した場合、影響をより強く受ける可能性があります。特に炭酸カルシウムの殻を持つ生物は、底質の pH 低下の影響を受けやすいと考えられます。

底生生物については、肉眼でみえる大きさをドレッジやトロール等の底引き網で採取できるような大型の底生生物 (メガベントス)、1 mm 以上の中型の底生生物 (マクロベントス)、1 mm 未満の小型の底生生物 (メイオベントス) に区分されます。

ドレッジによる大型の底生生物採取調査は、秋季調査を 2025 年 11 月 16 日に、晩秋調査を 2026 年 1 月 17 日にそれぞれに実施しました。苫小牧地域の水産重要種であるウバガイ (ホッキガイ) 生息密度等調査は、秋季調査を 2025 年 11 月 10 日に、晩秋調査を

²⁾ 海水に溶けた CO₂ が生物等に実質的に作用する CO₂ の量の指標とされており、文中の「CO₂ 濃度」とほぼ同様の意味を持つものになります。

³⁾ 今年度からは、センサ観測で得られたクロロフィル蛍光強度 (ppb) の値を使用します。

2025年12月13日にそれぞれ実施しました。

また、中型の底生生物及び小型の底生生物調査は、秋季調査を2025年11月14日、15日、18日に、晩秋調査を2025年12月8日、10日、23日にそれぞれ実施しました。

【調査の結果】

1. 海水の化学的性状調査

秋季調査の水温は 10.09～14.20 °C、塩分は 33.61～34.06、アルカリ度は 2,249～2,268 $\mu\text{mol/kg}$ 、DIC は 2,044～2,117 $\mu\text{mol/kg}$ 、pH は 7.86～8.02、 $p\text{CO}_2$ (計算値) は 372～489 μatm 、DO は 219～253 $\mu\text{mol/kg}$ 、DO 飽和度 (計算値) は 80～96 %、及びクロロフィル蛍光強度は 0.1～1.4 ppb の範囲でした。過年度秋季調査結果と比較すると、DIC の値が調査測点 2 の底層で、 $p\text{CO}_2$ の値が調査測点 1 の底層と調査測点 2 の下層及び底層で、過年度の最大値よりも高く、DO 飽和度の値が調査測点 1 及び 2 の下層及び底層で過年度の最小値よりも低くなっています。それ以外の調査測点及び項目については大きな変化はみられませんでした。

晩秋調査の水温は 7.63～9.71 °C、塩分は 33.77～34.04、アルカリ度は 2,262～2,271 $\mu\text{mol/kg}$ 、DIC は 2,096～2,123 $\mu\text{mol/kg}$ 、pH は 7.85～7.92、 $p\text{CO}_2$ (計算値) は 392～448 μatm 、DO は 253～262 $\mu\text{mol/kg}$ 、DO 飽和度 (計算値) は 87～91 %、及びクロロフィル蛍光強度は 0.1～1.3 ppb の範囲でした。過年度晩秋調査結果と比較すると、DIC の値が調査測点 1、2、5、6、8 及び 9 の全層、調査測点 3 の下層以外、調査測点 4 及び 7 の表層及び上層で、アルカリ度の値が全ての調査測点の全層で、 $p\text{CO}_2$ の値が調査測点 1 の表層以外、調査測点 2、4 及び 7 の表層及び上層、調査測点 5、6、8 及び 9 の全層で、pH の値が調査測点 1 の下層及び底層で、DO 飽和度の値が調査測点 1、4 及び 7 の下層及び底層で、塩分の値が調査測点 1 の表層以外、調査測点 2、3、4、5、6、7、8 及び 9 の全層で過年度の最大値よりも高く、 $p\text{CO}_2$ の値が調査測点 4 の下層、調査測点 7 の下層及び底層で、pH の値が調査測点 1、3、4 及び 7 の表層及び上層、調査測点 2、5、6 及び 9 の全層、調査測点 8 の底層以外で、DO 飽和度の値が調査測点 2、4、5、6、7、8 及び 9 の表層及び上層で過年度の最小値よりも低くなっています。それ以外の調査測点及び項目については大きな変化はみられませんでした。

前述したように、海水中の CO_2 は、 CO_2 の漏出が起ころなくとも、海域での光合成や呼吸 (有機物の分解を含む) など生物的な要因によっても大きく変化します。光合成と呼吸は海水中の酸素の放出と消費を伴うことから、これら生物的な要因による変化分を $p\text{CO}_2$ と DO 飽和度の関係から見積もることが可能であると考えられました。2011 年度から 2015 年度までの調査で得られたデータの解析により、調査海域における $p\text{CO}_2$ と DO 飽和度には曲線で示す関係があることが確認されています。この曲線の 95 % 予測区間の上限を超過するデータが確認された場合、 CO_2 圧入開始以前の傾向から統計的に外れたとみなされることから、漏出を懸念することとしました。ただし統計学的には、漏出が発生していない場合においても、2.5 % の確率で上限を超過するデータが確認される可

能性があります。

2025 年度秋季調査及び晩秋調査結果の底層の $p\text{CO}_2$ と DO 飽和度との関係を 2011 年度から 2015 年度までの調査結果と比較したところ、図 2 のとおり夏季調査時に CO_2 漏出による影響を否定できないデータがみられた 4 測点（調査測点 1、2、3 及び 6）も含め、95% 予測区間の上限を超過するデータ、すなわち CO_2 漏出を懸念させるデータはありませんでした。海底下深部からの CO_2 漏出に起因する場合、影響は長期的に継続するものと考えられますが、直後のモニタリングにおいて正常な範囲に戻ったことから夏季調査時の超過データは CO_2 漏出によるものではなかったと推察されます。

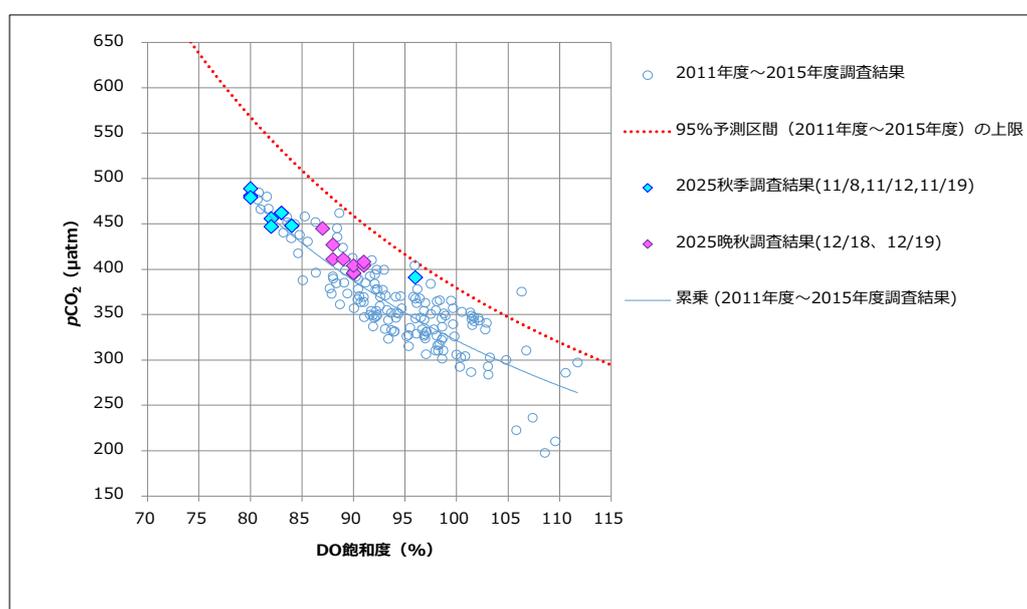


図2 底層の $p\text{CO}_2$ と DO 飽和度との関係

2. 底質調査

秋季調査の pH は 7.49～7.93、含水率は 22.0～33.1%、有機炭素は 0.6～8.8 mg/g-dry、無機炭素は定量下限値未満～0.5 mg/g-dry 及び全窒素は 0.30～1.27 mg/g-dry の範囲でした。硫化物は調査測点 3、5、7 及び C で検出され、0.1～0.4 mg/g-dry の範囲でした。

万が一 CO_2 が漏出した場合に値が低下すると考えられる底質の pH 及び無機炭素については、全調査測点の結果を過年度秋季調査結果と比較すると、大きな変化はみられませんでした。

晩秋調査の pH は 7.42～7.84、含水率は 21.6～34.0%、有機炭素は 0.7～9.5 mg/g-dry、無機炭素は定量下限値未満～0.2 mg/g-dry 及び全窒素は 0.32～1.48 mg/g-dry の範囲でした。硫化物は調査測点 3、B (1 回目のみ) 及び C で検出され、0.1～0.6 mg/g-dry の範

囲でした。

万が一 CO₂ が漏出した場合に値が低下すると考えられる底質の pH 及び無機炭素については、全調査測点の結果を過年度秋季調査結果と比較すると、大きな変化はみられませんでした。

3. 海洋生態系把握調査

(1) ドレッジによる大型底生生物（メガベントス）採取調査結果

秋季調査の出現個体数は、多毛綱（ゴカイの仲間）のみが出現した環形動物門、二枚貝綱（二枚貝の仲間）が多数を占めた軟体動物門、軟甲綱（エビ・カニ・ヨコエビ等の仲間）のみが出現した節足動物門の順でした。

底質の pH 低下の影響を受けやすいと考えられる炭酸カルシウムの殻を持つもので、出現個体数が多かったのはキララガイ、スガメソコエビ属（エビ・カニ・ヨコエビ等の仲間）、チヨノハナガイでした。

過年度秋季調査結果と比較すると、出現個体数（生息密度）の合計では、調査測点 8 で過年度秋季調査結果の 95 %信頼区間（平均値±2σ）⁴⁾を下回りました。それ以外の調査測点は 95 %信頼区間の範囲に収まっており、出現個体数（生息密度）の合計に大きな変化はみられませんでした。一方、一部の調査測点では大型底生生物の各分類群の組成は変動しており、今後も変動の傾向を継続的に把握していく必要があります。

晩秋調査の出現個体数は、多毛綱（ゴカイの仲間）のみが出現した環形動物門、二枚貝綱（二枚貝の仲間）が多数を占めた軟体動物門、軟甲綱（エビ・カニ・ヨコエビ等の仲間）のみが出現した節足動物門の順でした。

底質の pH 低下の影響を受けやすいと考えられる炭酸カルシウムの殻を持つもので、出現個体数が多かったのはキララガイ、*Ophiura* 属（クモヒトデの仲間）、スガメソコエビ属（エビ・カニ・ヨコエビ等の仲間）でした。

過年度秋季調査結果と比較すると、出現個体数（生息密度）の合計では、調査測点 5 及び 8 で過年度秋季調査結果の 95 %信頼区間（平均値±2σ）を下回りました。それ以外の調査測点は 95 %信頼区間の範囲に収まっており、出現個体数（生息密度）の合計に大きな変化はみられませんでした。一方、一部の調査測点では大型底生生物の各分類群の組成は変動しており、今後も変動の傾向を継続的に把握していく必要があります。

(2) ウバガイ（ホッキ貝）生息密度調査結果

ウバガイ調査は 2 回曳網を行いました。

⁴⁾ 「σ」は標準偏差を示します。95 %信頼区間を求めるための平均値と標準偏差は、同一調査測点における過年度秋季調査結果を元に算出しました。

秋季調査の1回目の曳網では、生息密度は407個体/100m²、湿重量は137.9 kg-wet/100m²、2回目の曳網では、生息密度は337個体/100m²、湿重量は107.8 kg-wet/100m²でした。また、個体重量に対する貝殻重量の割合は、1回目及び2回目の曳網とも71%でした。

過年度秋季調査結果と比較すると、生息密度（1、2回目とも）、貝殻重量及び軟体部湿重量では、それぞれの過年度秋季調査結果の95%信頼区間（平均値±2σ）の範囲に収まっており、大きな変化はみられませんでした。また、個体重量に対する貝殻重量の割合も大きな変化はみられませんでした。

晩秋調査の1回目の曳網では、生息密度は700個体/100m²、湿重量は229.0 kg-wet/100m²、2回目の曳網では、生息密度は410個体/100m²、湿重量は137.2 kg-wet/100m²でした。また、個体重量に対する貝殻重量の割合は、1回目及び2回目の曳網とも73%でした。

過年度秋季調査結果と比較すると、生息密度（1、2回目とも）、貝殻重量及び軟体部湿重量では、それぞれの過年度秋季調査結果の95%信頼区間（平均値±2σ）の範囲に収まっており、大きな変化はみられませんでした。また、個体重量に対する貝殻重量の割合も大きな変化はみられませんでした。

(3) 中型底生生物（マクロベントス）及び小型底生生物（メイオベントス）調査結果

秋季調査の中型底生生物の出現個体数は、多毛綱（ゴカイの仲間）のみが出現した環形動物門が最も多く、次いで、二枚貝綱（二枚貝の仲間）が多数を占めた軟体動物門、軟甲綱（エビ・カニ・ヨコエビ等の仲間）が多数を占めた節足動物門の順でした。

底質のpH低下の影響を受けやすいと考えられる炭酸カルシウムの殻を持つもので出現個体数が多かったのは、クルミガイ、ユキヤナギガイ、フクロスガメでした。

過年度秋季調査結果と比較して出現個体数（生息密度）の合計では調査測点3で過年度秋季調査結果の95%信頼区間（平均値±2σ）の範囲を下回り、調査測点9で95%信頼区間の範囲を上回りました。それ以外の調査測点は95%信頼区間の範囲に収まっており、出現個体数（生息密度）の合計に大きな変化はみられませんでした。一方、一部の中型底生生物の各分類群の組成は変動しており、今後も変動の傾向を継続的に把握していく必要があります。

小型底生生物の出現個体数は、線形動物門（線虫の仲間）が最も多く、次いで有孔虫目（有孔虫の仲間）のみが出現した肉質鞭毛虫門、ソコミジンコ目（ソコミンジンコの仲間）が半数を占めた節足動物門の順でした。

底質のpH低下の影響を受けやすいと考えられる炭酸カルシウムの殻を持つもので、出現個体数が多かったのは、有孔虫目、ソコミジンコ目、ノープリウス幼生でした。

過年度秋季調査結果と比較して、出現個体数（生息密度）の合計では調査測点 3 及び 8 で過年度秋季調査結果の 95 %信頼区間（平均値±2σ）を下回りました。それ以外の調査測点は 95 %信頼区間の範囲に収まっており、出現個体数（生息密度）の合計に大きな変化はみられませんでした。一方、一部の小型底生生物の各分類群の組成は変動しており、今後も変動の傾向を継続的に把握していく必要があります。

晩秋調査の中型底生生物の出現個体数は、多毛綱（ゴカイの仲間）のみが出現した環形動物門が最も多く、次いで、軟甲綱（エビ・カニ・ヨコエビ等の仲間）が多数を占めた節足動物門、二枚貝綱（二枚貝の仲間）が多数を占めた軟体動物門の順でした。

底質の pH 低下の影響を受けやすいと考えられる炭酸カルシウムの殻を持つもので出現個体数が多かったのは、キタスガメ、クルミガイ、フクロスガメでした。

過年度秋季調査結果と比較して出現個体数（生息密度）の合計では調査測点 4、5、7 及び C で過年度秋季調査結果の 95 %信頼区間（平均値±2σ）の範囲を下回りました。それ以外の調査測点は 95 %信頼区間の範囲に収まっており、出現個体数（生息密度）の合計に大きな変化はみられませんでした。一方、一部の中型底生生物の各分類群の組成は変動しており、今後も変動の傾向を継続的に把握していく必要があります。

小型底生生物の出現個体数は、線形動物門（線虫の仲間）が最も多く、次いで有孔虫目（有孔虫の仲間）のみが出現した肉質鞭毛虫門、ソコミジンコ目（ソコミンジンコの仲間）が半数を占めた節足動物門の順でした。

底質の pH 低下の影響を受けやすいと考えられる炭酸カルシウムの殻を持つもので、出現個体数が多かったのは、有孔虫目、ソコミジンコ目、ノープリウス幼生でした。

過年度秋季調査結果と比較して、出現個体数（生息密度）の合計では調査測点 3、6 及び 8 で過年度秋季調査結果の 95 %信頼区間（平均値±2σ）を下回りました。それ以外の調査測点は 95 %信頼区間の範囲に収まっており、出現個体数（生息密度）の合計に大きな変化はみられませんでした。一方、一部の小型底生生物の各分類群の組成は変動しており、今後も変動の傾向を継続的に把握していく必要があります。